

ヒマラヤ

No. 317



1998 APRIL



日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

1999年H A J 登山隊員募集

未踏峰（カバン 6,717m）

ガネッシュ・ヒマールとランタン・ヒマールの間は、数多くの知られざる山々があります。そのほとんどは6,000m級ですが、これまで全く試みられたことのない山群です。山容は7,000m級の山です。楽しい登山が期待できます。概要は下記のとおりです。（期間は協議によって変更可）

記

1. 期 間:1999年9月15日～10月31日(47日間)
2. 募集人員:6名程度
3. 負担金:95万円

チョム・カンリ（7,048m）

ラサから西北西約106kmの所にあるのが、チョム・カンリです。1996年秋中国・韓国合同隊によって初登頂され、97年春に日本隊が登頂しています。ルートは既登の南面を予定していますが、隊員の協議によって変更される場合があります。

記

1. 期 間:1999年7月20日～8月25日(37日間)
2. 募集人員:10名程度
3. 負担金:80万円
4. 切り:定員になり次第

ニンチン・カンサ（7,206m）

ラサから半日行程の所にヤムドク・ツォと呼ばれる大きくて美しい湖があります。その湖を見下ろすようにそびえているのが名峰ニンチン・カンサです。日本隊は既に4隊が登頂に成功しています。ラサからゆっくりと入山し、登山期間は21日間を予定しています。

H A J の登山隊は全てガイド登山ではありません。自己責任を認識して登山隊を構成します。

記

1. 期 間:1999年7月20日～8月25日(37日間)
2. 募集人員:10名程度
3. 負担金:80万円
4. 切り:定員になり次第
5. 申し込み:H A J 事務局まで

表紙写真

バラクン峰（6,471m）は'93年ニルカント峰（6,596m）E X P. の時、北東稜上からチャウカンバ峰（7,138m）と共に毎日眺めていた山である。

キャンプ地マジナ（4,560m）から見ると、その頂上部分は傾きが逆であるが、タンボチュからみたアマ・ダブラム（6,812m）を思い出させた。

1971年、I T B P 隊（隊長：フカム・シン）により初登頂されている。

（記：松山 昭）

ヒマラヤ No.317

1. 第19回インド・ヒマラヤ会議報告

9. 厳寒のラダック、ルプシュ地方

沖允人

14. H A J 30周年記念講演(1)

「中国登山運動の現状と問題点」

汪鉄銘

17. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・トピックス・Books〉

21. 中国高峰登山15年小史(17) 西藏その3

山森 欣一

24. 寸感・事務局日誌

第19回インド・ヒマラヤ会議報告

1998. 2. 1

今年で第19回を数えた新春恒例のインド・ヒマラヤ会議は、例年1月の最終日曜日に開催していたが、今年は当協会30周年記念祝賀会とのからみもあり、2月1日に豊島区民センターで開催された。

会場には、全国各地から、97年の登山実施隊や98年にインド・ヒマラヤへ出掛ける予定の登山隊の方々等48名の参加を見た。

また、30周年記念祝賀会へのゲスト・スピーカー、ヒマラヤン・ジャーナル編集長で、昨年11月にIMF副総裁に就任されたハリシュ・カパディア氏が参加、スライドを利用してインド・ヒマラヤの素晴らしさを語ってくださった。

山森欣一専務理事の開会の挨拶の後、会議日程に入った。

一日程一

9:20~11:45 「1997年インド・ヒマラヤの総括及び許可取得から出発までの実務ノウ・ハウ」

寺沢玲子常務理事からIMFの新人事、97年の入山状況、入域事情、登山規則の変更、出発から現地での渉外業務のノウ・ハウなどについて、また、中川裕常務理事から隊荷通関についての説明などがあった。

登山規則関係では、当日参加したエージェント、シカール・トラベル社のクマール氏が持参してくれた新規則が紹介された。トレッキング許可峰が正式に無くなった事や、環境保護税の値上げなど、登山者側にとっては嬉しいインフォメーションもあったが、ヴィザの期間が従来の45日から90日になったこと、連絡官への装備レンタル料金の値下げ、これまで認められなかった単独登山も許可されることなど、朗報もあった。

隊荷通関関係では、94年4月からアナカン扱い

ではなく、一般貨物として扱われる事になった事の再確認の説明があった。また、ガス・カートリッジについての関心が高く、現地での入手方法やLPGガスボンベからのリチャージの方法などが、一般参加の方々からも紹介された。

連絡官への装備レンタルに関しては、97年隊の方々から具体的なメリットやデメリットについての体験談が披露された。

また、車両のチャーターなどについての質問には、インド事情に詳しい沖允人氏から具体的な説明があった。

13:00~15:15 「1997年登山報告」

県連盟内での海外登山の普及を目的として行われた神奈川県勤労者山岳連盟隊のストック・カンリ登頂（香取純氏）、96年許可取得に関わるインド内務省とのやり取りから時間切れとなり、この度再度許可取得した群馬県高校教職員隊のチャウ・チャウ・カン・ニルダ登頂（高橋守男氏）、92年のドウラウパディ・カ・ダングⅡに続く勤労者山岳連盟登山学校隊のドウラウパディ・カ・ダングⅠ初登頂（近藤和美氏）の各報告が、それぞれスライドを交えて行われた。また、沖允人氏が、厳冬のラダックやアルナチャルを訪れた際の貴重なスライドをご披露した。

15:30~17:00 「ハリシュ・カパディア氏講演並びに質疑応答」

予定を変更し、特別参加のハリシュ・カパディア氏にインド・ヒマラヤの解説をしていただく。30周年祝賀会のために持参した豊富なスライドの中から選りすぐって、アルナチャル・プラデシュから東部カラコルムに至る広大なインド・ヒマラヤを紹介、インド・ヒマラヤの素晴らしさを再認識させられた参加者も多かったようである。

また、IMF副総裁でもあられるカパディア氏に、昨今のインド・ヒマラヤ全般に関する質疑応答を行った。

これで予定の会議日程を終了し、尾形好雄常務理事の挨拶で閉会となった。

インド・ヒマラヤ1997年 《入山状況》

インド登山財団（IMF）によれば、1997年にインド・ヒマラヤを訪れた外国登山隊は52隊で、前年に比べて5隊の増加であった。

国別では、イギリスが13隊、次いで日本が10隊、スペインと韓国がそれぞれ5隊、フランスとイタリアがそれぞれ4隊、ドイツが3隊、ニュージーランドが2隊、オーストラリア、チェコ、ポーランド、カナダ、スイス、スコットランドがそれぞれ1隊となっている。どういうわけかアメリカ隊が1隊も入っていない。

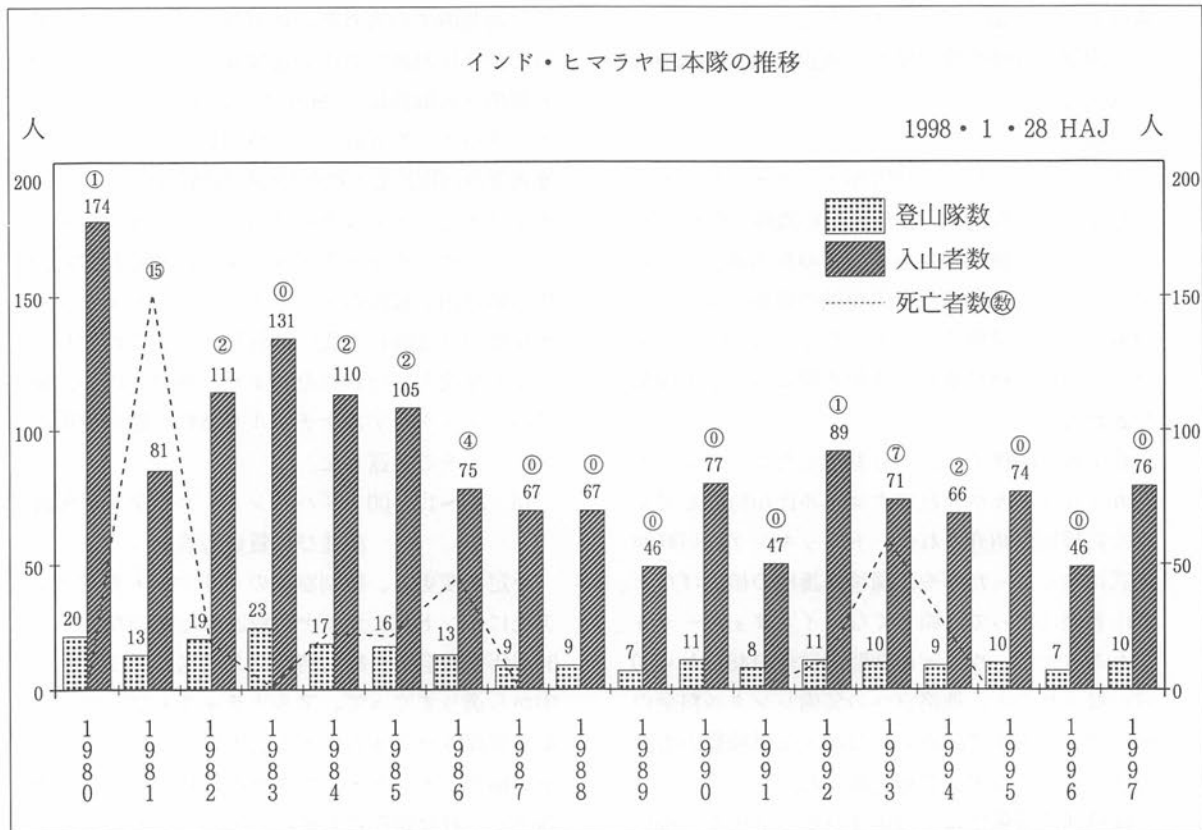
日本は10隊と、前年に比べて3隊の増加となった。

一方、インド隊の方は90隊と、前年に比べて7隊減少した。もっとも、インド隊の入山状況はIMFでもよく把握できておらず、現時点では定かではない。

登山許可取消しなど問題続出だった96年のインド・ヒマラヤだったが、97年はスムーズに行った隊がほとんどだったようである。インナー・ライン絡みのトレッキングや偵察なども、比較的支障なく行われたようで、ガルワールでは簡単な申請でバドリナート北部のガストーリまで一般のツーリストも入域したようである。

1980年以降の日本隊の推移は、下記表を参照願いたい。

日本隊の遭難事故は、95年、96年、97年と3年続いてゼロを記録しており、入山者数に対する死亡率は2.3%と若干低くなったものの、過去18年間で実に36名もの日本人登山者がインド・ヒマラヤに永眠した。



1997年インド・ヒマラヤ外国隊の記録

◎初登頂 ○登頂 ×失敗・試登

山 名	標 高	国 名	隊 長 名	許可期間	結果
ケダルナート・ドーム	6,831	韓国	Joong Ho Son	4 / 13 ~ 5 / 14	×
ケダルナート	6,988	フランス	Marc D'Anglejan	4 / 13 ~ 5 / 20	×
ブリクパント	6,772	ニュージーランド	Gilda Otway	4 / 27 ~ 6 / 2	×
バギラティ-Ⅲ	6,454	カナダ	Serge Angelucci	5 / 1 ~ 6 / 5	×
チャンガバン	6,866	イギリス	Roger Payne	5 / 1 ~ 6 / 23	○
トリスル-I	7,120	スイス	Nicolas Jaqus	5 / 1 ~ 6 / 10	×
シヴリン	6,543	イタリア	Bruno Attilio	5 / 5 ~ 6 / 9	○
バルジュリ ラムチール	5,922 5,662	イギリス	Harold Edwards	5 / 22 ~ 6 / 15	○
チャルン	6,548	JAC東海支部	鈴木常夫	6 / 15 ~ 7 / 31	◎
ヌン	7,135	韓国	Wie Suck Yang	6 / 11 ~ 7 / 26	○
ボロコンガ チャクラ	6,632 6,529	イギリス	Michael J. Ratty	7 / 22 ~ 8 / 31	○
チャウ・チャウ・カン・ニルダ	6,303	群馬高体連	高橋守男	7 / 24 ~ 8 / 19	○
サトパント	7,075	長崎県岳連	下田泰義	7 / 27 ~ 8 / 26	×
サラ・シュワ	6,238	イタリア	A. Bergamaschi	7 / 25 ~ 8 / 25	○
メントーサ	6,443	スペイン	Javier A. Amado	7 / 13 ~ 8 / 15	×
ドダ	6,550	北大山岳部	辺見 悟	7 / 7 ~ 8 / 30	○
ストック・カンリ	6,153	京都労山	花折敬司	7 / 25 ~ 8 / 25	○
シヴリン	6,543	イタリア	B .Lombardini	7 / 30 ~ 8 / 30	○
クン	7,077	イタリア	Paolo Ferro	7 / 28 ~ 8 / 25	×
カン・ユセー グーラップ・カンリ	6,400 5,900	ドイツ	Muehle Klaus	7 / 28 ~ 8 / 25	○
K R -Ⅲ	6,132	イギリス	Robing Trangmar	7 / 11 ~ 9 / 5	×
K R - I	6,157	イギリス	Dominic Jones	7 / 11 ~ 9 / 2	×
K R -Ⅲ	6,132	イギリス	Dominic Jones	7 / 11 ~ 8 / 29	×
ヌン	7,135	スペイン	Jose Bosch	8 / 1 ~ 8 / 30	○
ドウラウパディ・カ・ダンダⅠ ドウラウパディ・カ・ダンダⅡ	5,716 5,670	労山全国連盟	近藤和美	7 / 16 ~ 8 / 15	◎
ストック・カンリ	6,153	神奈川労山	香取 純	8 / 11 ~ 8 / 27	○
クン	7,077	フランス	Jean Pierre	8 / 1 ~ 8 / 29	○
マト・カンリ-Ⅱ	5,896	イギリス	Alison Poole(Ms)	8 / 3 ~ 8 / 25	○
バギラティ-Ⅲ	6,454	イギリス	Stephen Gallen	8 / 11 ~ 9 / 14	×
ナンダ・デヴィ東峰	7,434	韓国	Myeong Dong Lim	8 / 1 ~ 9 / 12	×
ルンセル・カンリ チャムセル・カンリ	6,666 6,602	ドイツ	Hans Dietrich	8 / 6 ~ 9 / 15	○
クン	7,077	フランス	Etienne Denis	8 / 1 ~ 8 / 31	○
ストック・カンリ	6,153	イギリス	Nick Moore	8 / 15 ~ 9 / 5	○

山 名	標 高	国 名	隊 長 名	許可期間	結果
CB-13	6,264	日本	イケオカヨシタカ	8 / 10 ~ 8 / 27	×
CB-11	6,044	イギリス	Colin Richard	8 / 14 ~ 9 / 20	○
ケダルナート	6,968	韓国	Byeong Tae Min	8 / 14 ~ 9 / 30	×
シヴリン	6,543	イギリス	Simon A. Yates	8 / 24 ~ 9 / 21	×
トロン	5,840	スコットランド	Scott F. Muir	8 / 22 ~ 9 / 28	○
ファワララング	6,349	ぶなの会	今井正史	8 / 24 ~ 9 / 30	○
バギラティ-III	6,454	スペイン	Oscar Gonzalez	8 / 29 ~ 10 / 4	×
ナンダ・デヴィ東峰	7,434	チョコ	Vit Maly	8 / 20 ~ 10 / 7	×
ヌン	7,135	スペイン	F. Navarro	8 / 31 ~ 9 / 30	○
メルー	6,660	イギリス	Owain P. Jones	9 / 4 ~ 10 / 18	×
チャングチュ	6,322	イギリス	Gary Murray	9 / 14 ~ 10 / 16	×
トレイ・サガール	6,904	オーストラリア	Athol T. Whimp	7 / 28 ~ 10 / 6	○
トレイ・サガール	6,904	韓国	Shin Jae Chul	8 / 25 ~ 10 / 3	×
無名峰	6,150	フランス	Rolland Yann	9 / 8 ~ 10 / 15	×
ケダルナート・ドーム	6,831	ポーランド	Janusz Golab	8 / 27 ~ 10 / 12	×
シヴリン	6,543	日本	宮崎元彦	9 / 10 ~ 10 / 30	×
シヴリン	6,543	ドイツ	W. Hadersdorfer	9 / 18 ~ 11 / 1	
ケダルナート・ドーム	6,831	スペイン	Francisco Jose	10 / 1 ~ 11 / 10	
シヴリン	6,543	ニュージーランド	John Barnes	10 / 3 ~ 10 / 30	

※数字はIMFによる

1997年インド・ヒマラヤ日本隊の記録

山 名	標高	国 名	隊 長 名	隊員数	期 間	結 果
チャルン	6,546	JAC東海支部	鈴木 常夫	12	6/22~7/30	7/11、4名初登頂、他2次に渡り6名計10名登頂
チャウ・チャウ・カン・ニルダ	6,303	群馬高体連	高橋 守男	10	7/23~8/20	8/7、8/10の2次に渡り、13名全員登頂
サトパント	7,075	長崎県岳連	下田 泰義	9	7/26~8/28	日数不足の為断面
ドダ	6,550	北大山岳部	辺見 悟	4	7/17~8/30	8/13、全員登頂
ストック・カンリ	6,153	京都 労 山	花折 敬司	10	7/27~8/12	8/4、3名登頂
ストック・カンリ	6,153	神奈川県労山	香取 純	10	8/10~8/27	8/19、9名登頂
ドウラウパディ・カ・ダンダ	5,716	労山全国連盟	近藤 和美	10	7/20~8/10	8/3、5名初登頂 8/4・5、II峰に計6名登頂
CB-13	6,264		イケオカヨシタカ	2	8/10~8/27	×
ファワララング	6,349	ぶ な の 会	今井 正史	7	8/24~9/28	9/12、13の両日に渡り3名ずつ計6名登頂
シヴリン	6,543		宮崎 元彦	2	9/14~10/26	悪天候のためABCからのアタックを断念

1997年インド隊の記録

◎初登頂 ○登頂 ×失敗・試登

山 名	標高	隊 名	隊 長 名	許可期間	結果
ギャ	6,794	The Climbers	Arun Samant	4 / 5 ~ 5 / 5	
カメット	7,756	Mt-ers' Ass. of Krishnanagar	B.S.Roy	4 / 15 ~ 5 / 15	○
カメット	7,756	Ordinance Factory Trekkers	A.Kumar Ghosh	5 / 10 ~ 6 / 20	
アビ・ガミン	7,355				
ケダルナート・ドーム	6,830	Chandannagar Mt-ing Ass.	Suman G.Neogi	5 / 1 ~ 5 / 30	
ケダルナート・ドーム	6,830	Morya Giribhraman Sanstha	Tushar K. Tonpe	5 / 15 ~ 6 / 15	
バギラティ-II	6,512	Mountain Quest of Calcutta	S.Kumar Pal	5 / 25 ~ 6 / 24	×
マトリ	6,721	Mountaineers&Climbers Circle	S. Ganguly	5 / 1 ~ 5 / 30	
マング-I	6,511	Giripremi	P.R.Pendharkar	5 / 1 ~ 5 / 30	
バギラティ-II	6,512	South Calcutta Trekkers Ass.	Dipen Samanta	5 / 15 ~ 6 / 25	
ジョギン-I	6,456	Youth Adventure Association	A.B.Dharajia	5 / 25 ~ 6 / 25	
-III	6,116				
パンパティア	6,000	The Mountaineers	Harish Kapadia	5 / 25 ~ 6 / 7	
チャウカンパ・コル					
バルテクンタ	6,578	Rock Climbing Club	M.S.Pawar	5 / 15 ~ 6 / 15	○
ルバルカン	6,187	Welham Boy's School	V.K.Painuli	5 / 27 ~ 6 / 14	
ストック・カンリ	6,153	Parvarohi	Ranvir Singh	5 / 31 ~ 6 / 29	
チャウカンパ-I	7,138	Parvat Abhiyatri Sangha	Shyamal Sarkar	5 / 1 ~ 5 / 30	
ケダルナート・ドーム	6,830	Doon School	S.C.Biala	6 / 1 ~ 6 / 30	○
ギャ	6,794	Himalayan Trails & Treks	Yousuf Zaheer	6 / 15 ~ 8 / 5	
フルーテド・ピーク	6,122	Himiyatri	G.C.Saha	6 / 20 ~ 7 / 20	
バルジュリ	5,922	NCC Boys	L.M.Pant	6 / 4 ~ 6 / 20	
デオ・ティバ	6,001	Yashwanti Hikers	D.J.Babasaheb	6 / 1 ~ 6 / 30	
マナリ・ピーク	5,569	IPCL	M.M.Arvindekar	6 / 1 ~ 6 / 30	
サトパント	7,075	Sampravartan	Narin Gautam	6 / 10 ~ 7 / 10	
無名峰	6,193	West Bengal Voluntary Blood	R.Majumdar	6 / 1 ~ 6 / 30	○
〃	6,154				○
〃	6,100				○
サトパント	7,075	Nehru Institute of Mt-ring	Col.Ajit Dutt	7 / 10 ~ 9 / 6	○
無名峰	5,518	Rocks & Snow	Amula Sen	6 / 23 ~ 7 / 23	
〃	5,845				
ラムジャク	6,318	Rock Climbing School	Rajani Rakshit	7 / 28 ~ 8 / 28	
ルバルカン	6,187	Snowland Mt-ers' Assembly	Samir Sengupta	7 / 1 ~ 7 / 30	
ビダン・バルバット	6,501	Nawabganj Mountain Lovers	Kaushik Das	7 / 1 ~ 7 / 30	
デオ・バン	6,855				
C B-12	6,248	IPCL	S.R.Vaidya	7 / 15 ~ 8 / 15	
C B-13	6,264				
ジュパン・ゴー	6,053	Comm.Officer 2nd Bn. J&K Rif.		7 / 1 ~ 7 / 30	

山 名	標高	隊 名	隊 長 名	許可期間	結果
シヴリン	6,543	The Himalayan Adventure Club	S.Singh	6/15~7/15	
カメット	7,756	Vashisht Rishi Sanstha	B.M.Paul	8/16~9/16	障害者
カメット アビ・ガミン	7,756 7,355	Assam Adventure Foundation	Jayanta K.Ray	8/1~9/10	○
ケダルナート・ドーム	6,830	Santragachi Shailo Sathi	Soumajit Roy	8/15~9/15	
シヴァ	6,142	Calucutta Trekkers Youth	A.K.Ghosh	8/15~9/14	
ガンゴトリ-II	6,590	Commanding Officer 17 Sikh	Capt. Vasudevan	8/15~9/15	
無名峰 " "	6,080 6,031 6,318	Girivihar	A.Burman	8/1~8/30	×
マナリ・ピーク	5,669	Mountain Lovers Association	Kishor Bhonsle	8/15~9/15	
C B-54	6,096	West. Railway Adv. Sport Ass.	S.S.Raut	8/15~9/15	×
ナンダ・コット	6,861	JNU Mountaineering Club	D.K.Dube	8/15~9/15	
フルーテド・ピーク	6,139	Howrah Dis. Mt-rs&Trekkers Ass.	N.Prasad Rao	8/1~8/30	○
無名峰 (バスバ谷)	6,190	Ins. of Climbers&Nature Lovers	B.Mukhoty	8/20~9/5	
カリンディ	6,103	Ins. of Climbers&Explorers	B.K.Chakraborty	8/16~9/12	
パルチャ・カンリ クーラップ・カンリ	6,065 5,900	Sonarpur Arohi		8/1~8/30	
無名峰	6,163	Mountaineers & Trekkers Unit	H.Sekhar Bose	8/16~9/14	
ハヌマン・テイバ-I	5,928	Assam Mountaineering Ass.	M.Sarania	8/1~8/30	
ハヌマン・テイバ-I	5,928	The Nature Lovers	M.R.Mhatre	8/25~9/15	
ナンダ・コット	6,861	Valiant Mountaineering Club	P.B.Bodhane	8/1~8/30	
ルドゥガイラ ガンゴトリ-III	5,819 6,577	Ramjas Old Students Adv. Ass.	M.S.Mujawar	8/15~9/15	
クル・プロリ	6,553	Youth Adv. Forum of Manipur	J.Maibam	8/1~9/14	
C B-16	5,822	Howrah Mountaineering Club	N.Sabharwal	8/15~9/15	
バギラティ-II	6,512	Sikhar Mountaineering Club	B.R.Chowdhury	8/15~9/15	○
メントーサ	6,443	Junipers	P.Roy	8/22~9/21	
グーラップ・カンリ	5,900	Qazing Adventure Sports Club	V.Singh	8/23~9/5	
バギラティ-II	6,512	Nagpur Mountaineers	A.S.Korde	9/1~9/30	
ガンゴトリ-I "-II "-III	6,672 6,590 6,577	KINSRDC	G.Ramchandran	9/1~9/30	
カリンディ	6,103	Himalayan Trekkers & Mt-ers	S.S.Negi	9/1~9/30	○
ナンダ・カート	6,545	Ordnance Fact. Mt-ers&Trekkers	A.Bhattacharjee	9/15~10/15	
ドゥルガ・コット パノティ	5,816 5,645	Himalayan Trotters	Biswadeb Ghosh	9/15~10/14	×
ラムチール	5,662	NCC Girls	Maj.L.M.Pant	9/17~10/3	○
ナンダ・コット	6,861	Kumaon Adv. & Env. Fellowship	D.K.Dube	9/1~9/30	
テルー コテシュワール	6,000 6,035	North Bengal Explorers Club	P.Roy	9/15~10/15	

山 名	標高	隊 名	隊 長 名	許可期間	結果
ケダルナート・ドーム	6,830	Dongri	S.Kumar J.Goyal	9/1~9/30	○
デオバン	6,855	11 Gorkha Rifles	Anirudh Negi	9/10~10/15	
イエオンブク	5,953	Himalayan Enjoyers Association	Sachin Karati	9/8~10/7	
ナル・パルバット	5,855	Bhadrakali Padatik	Bibuthi Paul	9/1~9/30	
ベビー・シヴリン	5,606	Bihar Adventure Foundation	S. Kumar Dutta	9/1~9/30	
カリンディ	6,103	Mountaineers Youth Ring	Samaresh Saha	9/14~10/14	
ケダルナート・ドーム	6,830	Army Medical Corps	Capt.V.Gupta	9/15~10/15	
バルテクンタ	6,578	Trekkers & Climbers	R. Mukherjee	9/15~10/14	
スイティラ	6,373	Sahyagiri Trekkers	Makarand Pendse	9/1~9/30	
タルコット パノティ テント・ピーク	6,099 5,645	Crescent Club	R.Mukherjee	9/8~10/7	
ジュバン・ゴー-I " -II	6,053 5,870	Himalaya's Beckon	Loverly Das(Ms)	9/15~10/15	○
スリ・カイラス	6,932	Alpino Summiters	R.S.Sawant	9/1~9/30	
ガンゴトリ-I -II -III	6,672 6,590 6,577	Greater Mumbai Police Force	S.G.Rangnekar	9/15~10/15	
ルドゥガイラ	5,819				
バルジュリ	5,922	Nilkantha Abhijatri Sangha	P.K.Mukherjee	9/1~9/30	
デオ・ティバ	6,001	Kanchrapara Quest Adventurers	R.N.Halder	9/1~9/30	
カン・ニルダ-I カン・ニルダ-II	6,303 6,158	CESC Sporting Club	Prasanta Ray	9/1~9/30	
カラナグ	6,387	Hill Top Mountaineering Club	BU Krishnamuthy	9/10~10/10	
スダルシャン・パルバット	6,507	Himalayan Nature&Adv. Fnd.	Sujit Seal	9/28~10/28	
ラダッキー シティダール	5,342 5,250	Punjab Mountaineering Foundation		9/1~9/20	
マカルベ	6,069	Chandernagore Chartitable book	Bank M>Barman(Ms)	9/1~9/30	○
タルコット パノティ	6,099 5,645	Jadavpur Univ. Mt-ing & Hiking	C Prasant Ray	9/19~10/14	
ナンダ・バナール ナンダカニ	6,236 6,029	The Climbers	Mohan K.V.	9/15~10/15	
スリカンタ	6,133	OSD Adventure Girls Expedition	C.P.Aitwal	9/15~10/15	
ハヌマン・ティバ マナリ・ピーク	5,928 5,669	Ordnance Factories Ammunition	R.P.Ghotane	10/1~10/30	
ルドゥガイラ	5,819	Charai-Utrai	P.K.Battacharyya	10/9~10/31	
ケダルナート	6,968	Akhil Maharashtra Giryarohan	Vijaya M.Gadre	10/1~10/30	
ゴリチェン山群		Sikhar Mountaineering Club	Pasang Namgyal	10/1~11/23	
カラナグ	6,387	Delhi Tourism Corporation	Amarjeet Singh	10/15~11/15	

×雪崩
隊長死亡

初のシェ
ルパ登山
隊

1998年インドの祝祭日

期 日	名 称	内 容
☆ 1月1日(木)	New Year's Day	元旦
14日(水)	Makara Samkaranti／Pongal ／Makradi Sanana	ボンガル(収穫祭)。太陽が北半球に入る。
☆ 26日(月)	Republic Day	共和制記念日(1950年インドが共和国となる)。
☆ 30日(金)	Idu' I Fitr(Ramazan Id)	イスラム断食月ラマザンの終わり。
2月1日(日)	Vasant Panchami ／ Sri Panchami	春の始まりを祝う北東インドの祭。サラスワティ女神を祀る。
25日(木)	Maha Shivratri	シヴァ神が祀られ、信者は1日断食する。
3月13日(金)	Holi	ホーリー、クリシュナ神を祀る。人々は年齢、カースト、宗教を問わず、色水をかけあう。
30日(月)	Gangaur(Gouri Tritiya)	ガウリ女神を祀るラジャスタンの祭。
☆ 4月8日(水)	Idu'z Zuha(Bakrid)	予言者アブラヒムが息子を生贄にした記念。
☆ 9日(木)	Mahavira Jayanti	ジャイナ教開祖マハビーラ生誕祭。
☆ 10日(金)	Good Friday	キリスト受難祭。
13日(月)	Vaisakhi	ヒンドゥ暦の元旦。パンジャブ地方の祭。
☆ 5月7日(木)	Muharram	イスラム暦の新年。イスラム教シーア派の哀悼の儀式。
☆ 11日(月)	Buddha Purnima	釈尊生誕祭。
6月26日(金)	Car Festival(Ratha Yatra)	オリッサ、ベンガル、クジャラート、タミルなどでジャガンナート神を祀る。
☆ 7月7日(火)	Milad-un-Nabi	予言者モハメッドの生誕祭。
8月8日(土)	Raksha Bandhan	ラッキー。ヒンドゥの姉妹達は兄弟達の手首に神聖な紐を結び、兄弟達を悪から守る。
☆ 8月15日(土)	Independence Day	独立記念日(1947年独立)。
8月26日(水)	Ganesh Chaturthi ／Vinayaka Chaturthi	学問と繁栄の神ガネッシュを祀る。
9月4日(金)	Janmasthan(Vaisnava)	クリシュナ神生誕祭。
	Onam	ケララの収穫祭。
9月28日(月)	Dussehra／Durga Puja	ダサラ。ラーマ神が魔王ラーバナに勝利した事を祝う。
☆ 10月1日(木)		ベンガルではドゥルガ女神を祀る。
☆ 10月2日(金)	Gandhi Jayanti	マハトマ・ガンジー生誕記念日。
☆ 10月19日(月)	Diwali	デワリ。ヒンドゥ教の新年。ヴィシュヌの妃神・富の女神ラクシュミーを迎える光の祭。
☆ 11月4日(水)	Gurru Nanak Jayanti	シーク教開祖ナナク生誕祭。
	Pushkar Fair	アジメール地方プシュカル湖で開かれるラクダ市。
☆ 12月25日(金)	Christmas Day	キリスト生誕祭。

インドは太陰暦のため祝日は毎年変わる。

☆インド大使館休館日

厳寒のラダック、ルプシュ地方

沖 允人

はじめに

これまでに何度かラダックのレーを訪れたが、それらはいずれも初夏から晩秋にかけてであった。一度、インダス川が全面凍結する厳寒のレーを訪ねてみたいと思っていた。1997年12月にそのチャンスがきた。ルプシュ地方のポロコンガ周辺（Polokongka）の情報を得に、現地に行ってみようということとなったのだった。

実は、1998年8月に昔の中京山岳会の山仲間とツォモリリ湖の北のポロコンガ・チュウという川とインダス川の間に横たわる長さ約25kmの屋根上の主峰ともいえるポロコンガ（6,632m）を登る計画をたて、登山申請をした。

しかし、1997年8月に、この山はイギリス隊によって初登頂されてしまった。残念であったが予想されたことであった。アプローチが短く、ツォモリリ湖を中心とするルプシュ地方の最高峰のルンサール・カンリ（Lunser Kangri, 6,666m）より僅か28m低いだけであり、しかもポロコンガ峠（Polokonga La, 4,940m）から、直接、岩稜が鋭くのびているこの山は魅力のあるものであった。

ポロコンガの第2登も検討したが、やはり中京山岳会のモットーであったバイオニヤワークをもう一度花咲かせたいと初登頂の期待できる山に変更することになった。今回はそのための下調査であった。

11月から6月頃までは、外部からレーにつながっているすべての道路は雪と凍結のために閉鎖される。ただし、週3便だけ飛行機が運航している。それなら年末年始の休みを利用して行こうということになった。メンバーは、梶田明、野村務、菱田勝美、沖允人の4人であった。63才から57才の、いわば、実年登山者である。

出発準備をしている頃に冬のラダックのドキュメンタリーがテレビで放映された。少年と父親、

そして、その仲間によるザンスカールの冬の旅の記録であった。大いに参考になった。

デリーからレーへ

1997年12月21日（日）日本を出発し、夕刻、デリーに到着した。翌22日はデリーに滞在し、食料などの買い物と、レーへの航空機の予約の再確認、ツォモリリ湖周辺の特別入域許可書の入手などに忙しく動いた。なお、特別入域許可は6ヶ月前に申請し、12月には許可がでていた。冬は、レーのDC（地方行政事務所）が不在になることが多いのでレーに到着してからでは許可取得は間に合わないことになってしまう。

23日は、デリーからレーに飛ぶ日であった。しかし、天候は曇っており、霧が濃い。4時に起床し、5時には空港へ行った。チェックインを済ませ、安全チェックも終了したが、濃霧でなかなか飛ばない。どうなることかと心配していたら、搭乗案内のアナウンスがあり、11時30分に5時間遅れで出発した。先刻のチェックインのとき、荷物を山ほど積みこんでいたが、お客は17人しか乗っていなかった。陸路が閉鎖されているため、航空便だけが冬の物資輸送の唯一の手段なので、飛行機は貨物便のようになってしまうのである。

飛び立って、30分ほどするとガルワール・ヒマラヤらしい雪山が見えてきた。さらに30分ほどすると、ツォモリリ湖が見え、1995年8月に私の初登頂したサラシュワ（Sarashuwa, 6,238m）らしい山やポロコンガなどが見えてきたが、少し逆光で反射しているのでピークの固定は困難であるが、とりあえず、ビデオ・カメラを回し、スチール・カメラ2台のシャッターを次々と切った。

やがて、雪の無い茶色の山々が見え出した。続いてサティ・ゴンパ、ティクセ・ゴンパ、そして、レーの町が見えてきた。スチュワードズが町が近いから写真撮影は止めるといった。何と

▼レーの町から見た凍ったインダス川とヘミス・ゴンパ方面の山々



か頑張って数枚シャッターを切った。帰国後、現像したところ、満足できる程度に写っていた。

レーに到着

レー空港に12時50分に着いた。ジブシー（ズキ・ジムニーと同形の小型車）という四輪駆動の小型車の運ちゃんが迎えにきていた。機内預けの荷物も到着し、空港から20分ほど走ってホテルに入った。レーのメイン・ストリートの中程の西にあるカングリ（Khangri）という名前のホテルである。カングリとは「氷河」という意味だという。ホテルのすぐ前に軍隊の宿舎と民間の学校があり、隣には火力発電所がある。ただし、発電所は、ジーゼル発電機で、夜と早朝しか運転しないので騒音は気にならない。冬に営業しているホテルはカングリだけである。

太陽が出ていると予想外に暖かく、外部の気温マイナス1度、室温プラス8度である。ホテルの窓から正面に見えるストック・カンリ山群（Stok Kangri, 6,153m）が冬化粧をしていて神々しいほどに美しい。雪線はインダス川の直ぐそばまで下りてきている。

レーで3日間ほど順応のためにゴンパの巡りや山へ向かう準備に過ごした。

空港に迎えにきた車2台を5日間雇うことにした。それにコックを雇った。

当初の計画では、レー～ツォモリリ湖（2泊）～タングラン・ラ（2泊）～レーと5泊6日の日程であったが、タングラン・ラ周辺（Taglang La）が雪が深くて通行止めになっているという

ので計画変更し、スモドゥ（Sumdo）まで行き、そこをベースにして4、5日間で、ツォモリリ湖（Tsomoriri）やボロコンガ峠周辺の探査をすることにした。なお、ヌブラ谷方面はカルドゥング・ラ（Khardung La）の登り口まで、シュリーナガル方面はフォト・ラ（Fotu La）からラマユルのゴンパあたりまで、パンゴン湖方面はチャン・ラ（Chang La）の麓まで、インダス川の上流はコマまでジープで行くことができる。もちろん、シュリーナガル方面を除いては、いずれも特別許可が必要である。

スモドゥへ

26日スモドゥへ向けて9時40分、レーを出発。レーの町からツォモリリ湖まで218kmある。今日のスモドゥはその100kmほど手前である。

道は、マヘ（Mahe）まではほとんど凍結しているインダス川に沿って溯る。川の中程で水が吹き出し、それが凍って盛り上がっているところもある。キアリ・プー（Kiari Phu）という谷がインダス川に合流するあたりで、インダス川は大きく右（南東）に向きを変える。3時間ほど走るとキアリ（Kiari）を通過する。キアリから約8kmで小さな村のあるヌリス（Nurnis）というところからコマ（Coma）まで106kmあり、冬でもそこまで道は開いているようである。私たちはその途中のマヘから右に折れてインダス川を渡り、ツォモリリ湖方面へ進む。

やがてヌリス（Nuris）を通過する。ここらあたりで川幅は広がる。行く手に立派な雪山が見える。左手は紫がかった色の砂山と岩山である。ここには人の渡ることができる吊り橋があり、その先にジグザグの踏み跡程度の道がついている。13時50分、ケサーヴ（Kesav）を通過する。

マナリ方面への分岐点にあるウプシ（Upshi）でも、温泉があり軍隊が駐屯しているチュマタンでも冬のせいかチェック・ポイントには人がおらず、チェックなしで通過した。キドナルから6km走ってチュマタンに着き、14時30分から15時まで休んでお茶を飲む。15時31分、マヘに着く。さすがにマヘには役人がおり、特別入域許可書のチェックを受けて鉄橋を渡ってよいということになった。

ここからは支流にはいるが舗装はなく、かなり荒れている。川はほとんど凍結し、アイススケート場のようになっている。しかし、傾斜は緩く、ラダックの運ちゃんたちは慣れていてうまく進んで行く。しかし、慎重である。

2時間ほど走って川幅が広くなり、向こうに雪山が見えてくるとスムドゥの村は近い。村の入口にカルゾック地区（Karzok）の始まりを示す立て札がポツンと立っている。

スムドゥの村の中心はそこからすぐであった。ゆるく傾斜した斜面に50戸ほどの集落がある。村人が出てきたので交渉し、2面が窓ガラスになった家を借用することにした。

少し落ち着いてみるとすきま風がひどく、身を刺すような風が入ってくる。入り口にビニールで即席のカーテンを吊り、ガラス戸にはツェルトとテント・フライを吊してカーテン代わりにした。

スムドゥの人が入れ替わり立ち替わり見物にやってくる。

夜が更けると気温は急激に下がり、底冷えがしてくる。シュラフを二重にしてもぐんぐん冷える。夜中に外に小用にでた。星が輝いていたが、刺すような寒気が、まさに襲ってくるという感じであった。マイナス30度ちかくまで下がっているようであった。

27日は、曇で今にも雪がきそうな空模様であったが、スムドゥからツォモリリ湖の途中まで往復した。

スムドゥの下から右に折れ、リビル・チュウ（Ribil Chu）という沢を渡り、雪の積もった高原を進む。このあたりからは、一面の雪原となっている。しかし、積雪は20cm程度である。リビル・チュウの上流には日本山岳会東海支部が1997年7月に初登頂したチャルン（Chalung, 6,546m）がある。

リビル・チュウからもう一つ沢を渡ると山道になる。夏は、短い草と石ころのところどころにある落石の危険の多い小沢を越したりするが、今は凍っていてスリッパに注意すれば問題ない。

タルチョーとオボという経文を書いた小旗や布切れの沢山あるキアガール・ラ（Kiragar La）を越える。標高は4,858mである。そこから少し

下ると、ペラ（Pera）と呼ばれている平原がある。もちろん今は雪原である。

しばらくキアガール・ツォ（Kiagar Tso）という湖が見えてくる。これも今は一面の雪である。

ピルン・ラ（Pirung La, 約4,800m）の緩い登りになり、峠からはツォモリリ湖まで急に下るようになる。しかし、雪が深いため、そのあたりまでで車は進めなくなった。タイヤ・チェーンを日本から用意してはいたが、とても利きそうにないふかふかの雪と氷のミックスである。もう少し、もう少しと頑張っているうちに、とうとう、後続の一台が路肩を外して雪にはまってしまった。みんなで押したり引いたりしたがなかなか脱出できない。大きく雪原にまわりこんでやっと脱出した。お陰で高所訓練をしたことになった。梶原と菱田と野村が少し先まで行って湖を見ようとしたが、雲に隠れて見えなかったという。

本日のジープ・サファリはそれまでにして、スムドゥへ帰った。

さすがに疲れて早々と就寝した。

ポロコンガ峠を越えて

翌日はポロコンガ・ラの先まで往復した。幸い天候は晴れであった。晴れた日は眺めは良いが、寒気が鋭い。

いよいよポロコンガ・ラ（Polokonga La, 4,940m）の向こうを偵察する日である。長丁場の行動を覚悟して行動食を沢山車に積む。スムドゥからプガ（Puga）という温泉の出ているところまで約30分である。温泉は盛んに湯煙を出している。

ポロコンガー・プー（Polokonga Phu）という川をさかのぼる。ポロコンガ峠のあたりは谷が狭まっている。プガから、左岸から入ってくる5本目の谷を過ぎたところが峠であった。ルルム（Rulum）という名前の谷らしい。

峠を過ぎると高原状になる。ポロコンガⅡ（6,030m）の岩と雪のピークがすばらしい。その尾根の続きにある岩のピークがポロコンガⅠ（6,632m）である。その尾根の東に見えているのがグルサーク（Gursak, 6,029m）であろう。

峠から3本目の谷の源頭に私たちの目標のトゥジェ（Thugje, 6,148m）があるはずである。し

かし、残念ながらここから頂上は見えない。

三角形の押し出しが3つあり、3つ目の次の谷をつめるのが良いという結論になった。その間、今は雪原になっているスタルツァプウク湖(Star-tsapuk Tso, 4,583m)の対岸近くまで行ってみたりして、相当時間を費やして偵察した。

デリーからレーに飛んだときに撮影した航空写真でみると、ポロコンガから続く尾根は途中2つの無名峰(推定6,300mと6,100m)があり、コルを経てトゥジェに続いている。トゥジェから北に延びる尾根は徐々に高度を上げ、無名峰(6,632m西にある泊まり場の名前からThagmarとも呼ぶことにした)に続いている。この間は若干痩せた尾根になっていて、雪庇が西側にはりだしているところがある。上部は急峻な雪壁になっているようである。

スタルツァプウク湖の奥には、ツォ・カール湖(4,526m)があり、これらの湖のそばを通るポロコンガ峠からのジープの道があり、ニヤムール(Nyamur)、タグマール(Thagmar)、トゥジェ(Thugje)の3つの泊まり場を経由してレー・マナリー道路のタングラン・ラの南のポングナーク(Pongunaga)あたりにでることが可能である。トゥジェの泊まり場からポングナークまで約2kmである。

偵察としての成果を十分得たので、スムドゥに帰ることにした。途中、テント生活をしている遊牧民のところを訪ねたりして、16時頃にスムドゥに着いた。

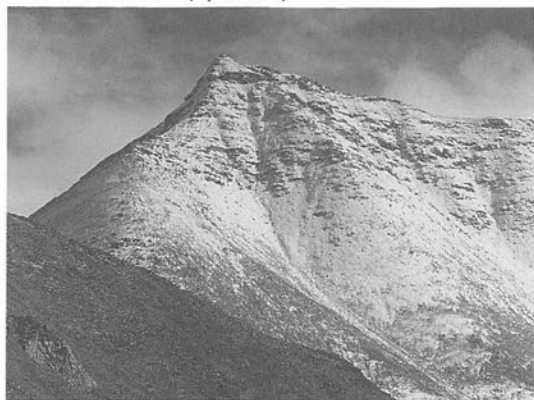
スムドゥを後に

翌日は小さい山を登る予定であったが、天候は



▲スタルツァプウク湖からポロコンガ方面遠望

▼ポロコンガ (6,632m)



曇りで、しかも夜中に小雪が降った。

予備日はもう一日あるが、天候が悪くなりそうなので、下山することにした。ピッケルとアイゼンも持参していたが、この寒さと高度と雪では、なかなか簡単にはいかなかった。無理に進むと、雪が降ったり、道路が閉鎖されたりしてレーまで帰られなくなるおそれもある。インダス川に出るあたりが危険が多いので、朝はできるだけ早く出発することにした。

運ちゃんも早立ちを考えて、まだ、暗いうちの4時過ぎからエンジンを石油コンロで暖め始めた。毎朝のことだが、石油コンロの火でエンジンを暖めないとエンジンがかからない。一台がなかなかエンジンが掛からず、やっと6時になってスタートした。早朝にも関わらず、村人が手を振って見送ってくれた。

途中、凍結したところが多くなっていたが、なんとか進むことができた。往路を走ってウブシに着いた。14時頃に、なつかしいカングリ・ホテルに帰着した。

カングリ・ホテルは水道管が凍っていて水がない。したがって、シャワーも使えない。できれば明日にでもデリーに帰りたいと航空会社に行ってみたが、先週からフライトはキャンセルが続き、400人近くが待っているという。諦めざるを得ない。

レーの年末年始

翌日の12月30日はレーでは新年を祝う習慣があり、ホテルでも19時頃に階段にローソクが何本も灯され、新年パーティが食堂で開かれた。ホテル

の窓から見える小さなゴンパを飾ったイルミネーションがきれいだった。

続いて、31日は、チベット仏教の新年だということで、また、19時頃に夕食パーティだと呼びにきた。4人そろってでかけた。ラム、ウィスキー、コココーラなどの飲み物にダルマングやメリケン粉でつくったツマミもいろいろあった。飲ませ上手のインド人がいて、座を盛り上げていた。私たちの他に、このホテルの泊まり客全員であるフランス人夫妻と娘、イタリア人親子と友人、インド人男性2人が出席していた。22時まで音楽を聞いていたりして楽しく過ごした。

1月1日（木）は、これまでにない晴天であった。元旦であるが、町は平常どおり、特別の行事はないようであった。

今日のフライトがキャンセルになるとその後のスケジュールがメチャメチャになる可能性がある。デリーが濃霧でなく、晴天が昼すぎまでつくことを祈って空港で待っていた。

やがて、厳しい安全チェックが始まり、荷物は積み込まれた。飛行機への搭乗直前にクラブのところでもう一度ボディ・チェックと手荷物検査があった。そして、やっと機上の人となった。帰路はツォモリリ湖周辺の山々は見えなかった。

おわりに

レーを中心とする山々の幾つかは冬期登山が可能である。アプローチも、タイヤ・チェーンなどを用意すれば、かなりジープ利用で短縮できる。積雪は多くないので、ルートを選べば雪崩の危険は少ない。ただし、氷は固く、気温はマイナス30度くらいまでさがる。

米や肉など生活必需品を売る店や野菜を売っている露天の店は開いている。凍りついたレーの町を散策してみると、観光客のほとんどいない、昔ながらのレーの生活の雰囲気味わうことができる。

山の情報誌「岳人」



毎月15日発売（日・祝日の場合は前日）定価700円

■本誌の年間購読ご案内

本誌の購読は、全国の書店、東京新聞販売店、中日新聞販売店、北陸中日新聞販売店で承ります。

直接購読ご希望の方は、とじ込みの振替用紙に「岳人何月号」からとお書きのうえ、送り先郵便番号、住所、氏名を明記して、ご送金ください。

郵送料は124円です。年間購読料は8,900円で送料は当社負担です。

お求めの本誌に乱丁、落丁がありましたらお取り替えいたします。

98年	特集
★ 1月号	ぼくの好きな雪の山小屋で
2月号	粉雪わけて爽快山スキー
★ 3月号	駅から登るとっておきの山
4月号	新緑と残雪を求めて5月の山
★ 5月号	山の本、名作をめぐる春山紀行
6月号	高層湿原、もう一つの尾瀬へ
★ 7月号	夏は北海道の花と溪流へ
8月号	真夏に涼を求めて、高原へ
9月号	初秋の単独行の山歩き
★10月号	上信越の紅葉をさぐる
11月号	名峰を訪ね、冬枯れの温泉へ
12月号	冬山入門、心構えと特選コース

（★は特大号となります）

東京新聞出版局（中日新聞） 〒108-8010 東京都港区港南2-3-13 TEL 03-3740-2674
（東京本社） 全国の書店で発売中／中日新聞販売店でも取りつぎます

中国登山運動の現状と問題点

中国登山協会副主席 汪 鉄 銘

■ はじめに

中国の国土は広いですが、国土の面積の3分の2を山野が占めております。主な山脈で有名なのは、アルタイ、天山、崑崙、ヒマラヤ山脈などですが、この他にも、タングラ、ガデセイ、横断、キレン、秦嶺、南嶺、台湾山脈などがあります。また、世界で一番高い青海省とチベット自治区にまたがる青藏高原や新疆ウイグル自治区のパミール高原などもあります。

地球上には、八千メートル級の山が14座ありますが、その内の9座が中国国境と国内にあります。七千メートル級の山は150座、六千メートル級の山も数百座、五千メートル級の山にいたっては、数千座あります。これらの山々の美しさ、厳しさに憧れて外国の登山家とトレッカーたちが、続々と詰め掛けてきております。

■ 中国古代の登山活動

人類の歴史は、たえず大自然を認識し、大自然に適応し、大自然を改造する歴史です。人々は生活の中で常に山と共存してきました。中国の「史記」によりますと、二千年前の皇帝が、東の丸山と泰山、西の崑崙、南の湘山と熊耳山、北の釜山を登ったと記しております。「夏」の時代の大禹が洪水を防ぐために常に山に登り、そのために登山専用の靴を発明しました。

唐の時代の西暦627年に、玄奘は長安を出発して天山に沿って中央アジアから、アフガニスタン、パキスタンを経由してインドに行きました。仏教の經典と共に崑崙山脈を越え、砂漠を横断して645年に長安に戻りました。この時の玄奘をモデルにして生まれたのが有名な「西遊記」です。

明の時代には、有名な旅行家である徐霞客は、30年をかけて中国の名山大河を歩き本を残してい

ます。沢山登った山の中には、五岳（東＝泰山、西＝華山、南＝衡山、北＝恒山、中＝嵩山）や太華山、五台山、黄山、廬山などがあります。徐霞客の残した本の記述の中には、山の地形、川の流れ、気象状況、登山ルートなどについて、詳細で系統的な記録、分析が記述されており、古代地理学などに大きく貢献しました。

古代の宗教は、登山と密接な関係がありました。神のシンボル、信仰の対象としての「聖山」があり、その場所には沢山の信者が巡礼としてやってきます。例えば、八大神山として知られている、カン・リンボチュ（カイルス）、クーラ・カンリ、梅里雪山、ニエンチェンタンラ、アムネマチン、ニンチン・カンサ、ヤルラジャンボ、ロザ・リなどです。仏教の四大名山の五台山、普陀山、峨眉山、九華山もそうです。

中国の民衆の間には、3世紀の頃から、旧暦の9月9日を「重陽節」と言って、天高く空気清涼の頃、酒や食物を持って友人、知人を誘って山に登ったり、高樓名台に登って楽しんできた慣わしがあります。「9」は「久」と発音が同じなので「九九」は、健康長寿の意味になります。登山を一種の健康法としてやっていたわけです。

■ 現代中国の登山運動

現代の登山運動は、18世紀のヨーロッパ・アルプスから始まったと言われております。ヨーロッパ・アルプスを中心に発展してきた登山運動も、19世紀の末頃には世界中に広がりました。中国の西にあるムスターグ・アタでスウェーデンの探検家ヘディンが登山を試みたのもこの頃です。1921年からイギリス隊が8回も中国・チベットからチョモランマの登頂を狙いましたが、全部失敗しました。1924年にはマロリーが行方不明になるという遭難事故もありました。

中国は、旧ソ連の指導を受けて、1955年に初めて現代登山運動を始めました。6千メートルの団結峰と十月峰に登頂しました。翌年には初めて中国人による登山隊を組織して、詩人の李白が登ったことで有名な、陝西省にある太白山（3767m）に登頂しました。このことによって、登山は正式に中国の体育運動の項目となりました。まさに中国の現代登山運動の誕生となりました。

発足当時の中国の登山運動は、労働組合に所属していました。1958年から国家体育運動委員会の傘下に入り、6月に「中国登山協会」が成立しました。そして、中華全国体育総会の団体会員となったのです。当時、中国登山隊の活動費用は政府から交付されました。

初めての高峰登山が、56年にムスターグ・アタ（7546m）とコングール・チュビエ（7530m）で行われ、両方とも成功しました。60年には北側からチョモランマの登頂に成功しました。北側から登頂したのは世界で初めてのことでした。その後の10年間で八千メートル峰を2回、旧ソ連の山も含めて、七千メートル峰を5回、六千メートル峰を10回登りました。このような成果をあげることができたのは、政府の強い支持と登山関係者の努力があったからにほかなりません。中国の登山レベルは世界の水準に達したのです。

中国の70年代の登山運動は文革の影響を受けて一時中断されました。その後、3年間の準備期間を経て、75年5月27日に中国隊がチョモランマの登頂に成功しました。登頂者の9人は同時登頂としては最多記録となりました。女性のバンドーは、田部井淳子さんに次いで2番目の登頂者となりましたが、勿論北側ルートからの女性登頂となったのです。この時は科学調査が行われ、測量した結果は、頂上の高さが、8848.13mとなりました。その他各分野の科学調査が実施されました。この時期のチョモランマ登山は大規模で、隊員数も60人が200人を越え、75年は434人にもなりました。

1978年、中国は4つの現代化を進めるため、開放政策をとるようになりました。中国登山協会は、政府に対して、外国隊に対して計画的に中国領の山々を開放するよう提案し、これが受け入れられて許可されました。79年にこのことを世界中に公

表しました。当初はチョモランマ、シシャパンマなどの8座を開放し、早速、日本とドイツの偵察隊がチベット自治区に入りました。

外国隊に山々を開放して約20年になりますが、世界の30の国や地域から千余りの登山隊を受け入れ、人数も2万人を超えました。このうち日本からは260隊、約2450人が訪れました。この結果外国との交流も深まりました。例えば中国登山協会と長野県山岳協会は、1981年から10年間、登山技術を中心とした交流を行い、大変な成果を得て90年に終了しました。また、84年からは、10の国や地域と合同登山を実施し、その数も30回を超えました。そして中国登山協会は85年国際山岳連盟（UIAA）に加盟し、91年にはアジアスポーツクライミング委員会に加盟、94年には友好諸国とアジア山岳連盟を創立して理事国となりました。

外国隊に山々を開放してから、中国人も八千メートル峰を8座登り、チョモランマ登頂者も20人になりました。中国人も徐々に海外の山々を登ることができるようになりました。日本では登山する若者の数が減る傾向にあると聞いておりますが、中国では逆に若者の登山者が増えてきております。特に大学の登山活動は活発になっており、幾つかの七千メートル峰に登頂しています。今年は、北京大学の隊がチョー・オユーに挑戦する計画が進んでいます。全国のスポーツクライミング大会も既に11回開かれており、この種目の人気はウナギ昇りです。

■ 中国登山運動の現状

1996年7月に開かれた「中国登山協会全国委員会総会」で、「第五回全国委員会」が構成され、曾曙生主席などが選出されました。また、中国登山協会の規約改訂案が可決され、新しい組織法も制定されました。97年12月の「中国登山協会主席会議」では、中国人による登山クラブの在り方が検討されました。また「国内登山管理規定」も作成され、中国人の登山者を管理し、健康的に発展させ、登山運動を活発に推進し、優れた登山者を育成していくつもりです。

高所登山は、中国登山運動の重要な位置を占め、世界的なレベルにあります。中国登山協会は、現

在進行中の「チベット登山隊」が、世界の八千メートル峰14座全部に登頂しようという計画を全面的に支持しています。この計画は21世紀の初め頃まで続きますが、その結果何人かの人が、14座の全座登頂に成功するものと信じております。また、今年の末までには、二人が世界七大州の最高峰登頂者となるものと思われます。

中国国内でスポーツクライミングが始まったのは10年前です。1987年に第一回全国大会を行い、毎年一回開催しています。大会に参加できるのはまだ数百人しかいませんが、段々と増えつつあります。中国登山協会に登録されている人工岩場は、完全ではありませんが全国に7つあります。競技のレベルはまだ日本や韓国に及びません。

中国登山協会では、昨年からスポーツクライミングの宣伝を積極的に行いました。そのため、マスコミでも度々取り上げて報道しましたので、全国各地から情報を求める電話が頻繁にかかってくるようになりました。人気上昇中のスポーツクライミングは数年の内に、国内で普及してレベル・アップが期待されています。

中国国内の大衆登山は、全国各地で様々な形で行われています。例えば「泰山国際登山祭り」は、11年間開催されていますし、「北京八達嶺長城お正月登山大会」は、3回開催されています。夏のキャンプも毎年何回も開催されています。中国登山協会では、このような行事をどんどん支援して、国民の健康の向上を計る為、努力していくつもりです。

高所の科学調査の分野では、中国科学院が1997年にアメリカと合同でシシャパンマの氷河を調査しました。その時、20人が七千メートルまで登りましたし、北京大学や清華大学などが組織した登山隊では、登山と科学調査を兼ねています。

経済発展に伴い、人々の生活に段々余裕があるようになって、登山人口が増えつつありますが、それと同時にゴミ問題が段々と深刻になってきました。政府は環境保護意識を強調すると同時に、具体的な措置をとって、山の環境保護に力を入れています。観光地域にゴミ箱を設置したり、掃除係りを配置しました。チョモランマやチョー・オユー、シシャパンマなどの地域には、ゴミ処理

のための人を派遣し、清掃もしました。中国登山協会でも、夏のキャンプを開催して、参加した子供たちに、環境保護の意識を教育しています。

外国の登山隊が、中国で数多く登山した結果、中国の登山者は、これらの機会を得て多くの登山技術を学ぶことができました。また、外国隊の支払う登山費用によって、中国の登山運動を進展させることができました。そのような結果、今では中国人が海外に行って登山ができるようになりました。それがまた、登山の啓蒙になり、多くの中国人が登山に興味を持つようになっているのです。

■ 問題点

1. 中国登山協会が、短い期間でこれほどの成果を収められたのは、計画経済体制の下で、政府の全面的な支持があったからこそであります。現在は、市場経済となり従来の体制では適応できません。市場経済体制に応じた体制を模索して、登山事業を発展させなければなりません。

2. 中国の登山運動は、高所登山を目標として実施して来ましたが、登山技術のレベルはそれほど高くありませんし、参加する人の数も多くありませんでした。今は、大衆登山が普及しつつありますが、彼らを指導する人材が不足しています。

3. スポーツクライミングのレベルもまだまだ低いです。資金が不足しているため、人工岩場の数も少ないです。コーチ、審判員、ルート・セッターのレベルもまだまだ低いのです。

4. 中国には、高所環境保護の管理部門が統一されていません。統一した法律も規則もありません。単に掃除をするぐらいでは効果は余り期待できません。法律や規則を早急に制定して、登山者に遵守してもらうようになれば、環境は保たれて美しい山になると思います。そして登山運動も健全に発展すると思います。

勿論、問題点はまだまだ沢山あると思いますが、皆様の意見ご指導を宜しくお願い致します。

(注) この講演はH A J 創立30周年記念として1998年1月25日科学技術館サイエンス・ホールにて行われたものです。

地域ニュース

《インド》

暗殺の被告全員に有罪

インド南部チェンナイ（旧名マドラス）の特別法廷のナバネタム判事は1月28日、1991年5月のラジブ・ガンジー元首相暗殺事件の被告26人全員に有罪判決を下した。被告はスリランカのタミル人過激組織「タミル・イーラム解放のトラ」（LTTE）の支持者で、2人が殺人、残る24人が武器の不法所持、殺人ほう助などで有罪判決を受けた。（東京新聞 1.29）

インド総選挙始まる

昨年12月の下院解散に伴うインド総選挙の第1回投票が1月16日午前7時（現地時間）から、首都デリーやウッタル・プラデシュ州など二十の連邦政府直轄地・州で始まった。

今回の総選挙は5回に分けて実施され、この日の第1回投票では全体の約40パーセントに当たる二百二十二の選挙区が対象になる。3回目の投票が終わった後の3月2日から開票が始まり、4日ごろ大勢が判明する見通し。

インド各地では投票日を前に、選挙妨害とみられるテロや暴動が続発、死者は約百人に上っている。このため政府は警察に加え、十万人以上の軍を動員、治安の確保に当たっている。

（東京新聞 2.16）

インド・ヒマラヤ登山申請最新情報

第19回インド・ヒマラヤ会議当日に入手した情報によると、1996年11月の新規則発表の後、インド・ヒマラヤ登山申請に更に修正・変更が生じた。実施時期は1997年11月1日からとのことである。

1. 1隊当たり3百ドルの環境税徴収額を4百ドルとする。これに伴い、1隊当たり千ドルの環境保護費のデポジットは不要とする。
2. 連絡官による登山隊の環境保護証明は不要である。登山隊自信で環境保護やゴミ問題に留

意すること。

3. 従来通り無線機の使用許可申請は必要であるが、IMFから有料で借用する場合にはこの限りではない。レンタル料金は下記の通り。
 - a. 4台 4週間まで2百ドル
 - b. 4週間若しくは4台を越える場合、1台当たり10ドル
 - c. 保証供託金1台当たり 450ドル
4. これまで許可を出さなかった単独登山を認める。
5. 希望する隊には連絡官用装備一式を5百ドルで貸し出す（昨年度は7百ドル）。
6. 従来7枚ずつだった（シッキム、アルナチャルなど特別地域の場合は8枚）申請用紙その他の書類は8枚ずつ提出のこと（同9枚）。
7. これまで45日間だった登山ヴィザの期間を90日とする。
8. 有事の際のヘリコプター及び救援隊出動に備えて、IMFに対して最高6千ドルまでの支払い可能な保険に加入のこと（昨年20万ルピーとのことだったが、ドル建てとなった。また、ゴールデン・クレジット・カードも有効とのことだったが、このたび撤回された。）
9. 登山料その他の支払い方法は、現金や旅行小切手ではなく送金小切手／マスターカード／ヴィザカード／銀行為替に限定する。なお、支払に際してはそれぞれの項目毎に分けて支払うこと。
10. 従来のトレッキング・ピーク扱いの山はなくなり、全て通常の登山申請が必要となる。
11. オープン地域内の5千メートル以下の山は登山許可は不要である。連絡官の同行の義務もない。
12. 高所順応の為であっても、いかなるピークにも無許可で登ってはならない。
13. 観光ヴィザでの登山は認めない。
14. IMF公認のエージェントを利用すること。
15. 以下の地図のコピーを3ドルで供給する。
 - a. Garhwal Himalaya -OST- 1/15万
 - b. " WEST 1/15万
 - c. Sikkim Himalaya 1/15万

- d. Karakoram 1/60万
- e. Indian Himalaya-Jammu & Kashmir
(Leh,Zaskar & Nubra Valley)
- f. -Do-
(Kargil,Zaskar & Nun Kun Area)
- g. Himachal Pradesh
(Karpa-Kinnaur,Spiti & Shimla)
- h. -Do-
(Kullu Valley,Parbati Valley & Central
Lahaul)
- i. Kumaon-Garhwal
(Pindari Glacier,Badrinath & Nanda D-
evi Area)
- j. Karakoram
(Siachen,Rimo,Saser Kangri Area)
- ※e～jの縮尺は1/20万
- k. Trekking map of Himachal Pradesh
- l. " Kumaon Himalayas
- m. " Gandotri&Yamnotri
- n. " Ladakh
- o. Shyok (Contour)
- p. Tso Morari (Contour)
- q. Kargil (Contour)
- r. Pangong Tso (Contour)

※o～rの縮尺は1/25万

The Indian Mountaineering Foundation.
Benito Juarez Road,Anand Niketan,
New Delhi-110 021 FAX : 91-11-6883412

IMF新人事

1997年11月付 IMFの新人事は下記の通り。

総 裁 M.S.Gill
副総裁 Harish Kapadia
Suman Dubey
秘 書 A.K.Bhattacharyya
局 長 J.P.Bhagaljee

トピックス

ネパールNGOにご用心
「金集め」横行大使館警告

世界で最も貧しい国の一つネパールで、非政府組織(NGO)が雨後のタケノコのように急増している。しかし、実際は「カネ集め」だけが目的のNGOが多く、ネパールの識者らは「こんなことが続けば、わが国のNGOは対外的に信用をなくす」と嘆いている。

カトマンズの日本大使館は最近、「日本政府からも公認されている」と偽ってNGOの名を山車、日本企業や個人に寄付をよびかけて外貨を稼ぐ例が横行しているため、じゅうぶん注意するよう警告を出した。

1人当たりの国民総生産が二百十ドルのネパールでは、日本人には少額と映る寄付金でも大金だ。

ネパールでNGOが急増したのは、1990年春の民主化以降だ。それまでは五百団体足らず。それが今では数万までふくれた。政府に登録する義務はないので実数は把握しにくい、関係者は「少なくとも1万6千、多く見積もれば3万」とみる。

NGOは外国の企業や団体、個人から容易に寄付金を受け取れるほか、「活動のため」と外国製四輪駆動車を低い関税で輸入できるなどの特典がある。このため、利に聡い人たちが数年前から「NGO」を自分たちのカネもうけに利用し始め、知識人からは「NGOビジネス」とひんしゅくを買っている。

昨年11月にはNGOを隠れミノに40人の若い女性を事務所に集めて営業していた、有力政治家の親族の売春組織が摘発される始末だ。

これだけNGOの数が増えたもう一つの理由は、家族・親類で利益や特権を独占する縁故主義の横行がある。一族が複数のNGOを設立して「うまみ」を独占し、経費の使途やスタッフの陣容は公表しない。

「せっかくの善意の寄付で私腹を肥やしている。不明朗だ」との批判もマスコミから起きた。「本当に予算が欲しいまじめなNGOには金が行かず、なせかビジネスNGOの所に金が集まる」とあるジャーナリストは言う。

カトマンズの代表的NGO「人権・環境・開発国際研究所」の代表、ゴバル・S・チンタンさんは「本来のNGO活動をしているのは1万もない、

残りの多くは各政党が政治資金の吸い上げ機関として利用している」と批判している。

(朝日新聞 1. 6)

中国、貞操観念“違反”で罰金

浙江省で婚姻届の身体検査の際、女性に婚前交渉があったことが分かり、新郎新婦とも罰金を取られたことが、上海紙・文匯報で報道された。地方で横行する費用徴収(乱収費)の極端な例だが、中国農村部での貞操観念の厳しさが浮き彫りになった。

罰金を取られたのは同省温嶺市の蔣友兵氏と結婚相手の女性。2人はこのほど、同市の保健所で婚姻届けに必要な身体検査を受けて合格証明書を得了。しかし、町の計画出産委員会による検査では、女性に婚前交渉があったことが判明。同委員会から「貞操観念」に反するとして、平均月収の3倍近い千5百元(1元約15円)の罰金を請求された。

2人は町に掛け合って千元にまけさせ、婚姻届を出した。女性は郷里でも同様の理由で2百元の罰金を取られたという。

中国では結婚前の身体検査が義務付けられ、性病や伝染病がチェックの対象になっている。

(東京新聞 1. 29)

インドで原爆展

世界的な核管理の流れに抗して核の選択肢を保持するインドで、被爆体験の実相を伝えようと広島、長崎両市が地元の団体と協力して開く「ヒロシマ・ナガサキ原爆展」の一般公開が1月30日、ムンバイ(旧名ボンベイ)で始まった。

両市は1995年からニューヨークなど海外での原爆展を続けているが、アジアでの開催は今回が初めて。

一般公開日の30日は、非暴力・平和主義を貫いたインド建国の父マハトマ・ガンジーの没後50周年にあたり、インド側は「二度とあってはならぬヒロシマ、ナガサキ・ガンジー没後50周年記念行事」と位置付けた。

反響は予想以上で、一般公開に先立つ29日の夜、ネルーセンターで開かれたオープニング・セレモ

ニーには、インド側の共催3団体の呼びかけで主賓のアレグザンデル・マハラシュトラ州知事を始め、3百人以上が出席。取材メディアも英BBC放送を含め28社に上がった。(1. 31東京新聞)

インド政府観光局新局長就任

暫く空席だったインド政府観光局東京事務所長(極東地区総局長)に、この度シヴァカミ(M.S.)さんが就任した。なお旅行相談窓口では、日本人スタッフの平千佳さんと今野歩さんがインド旅行に関する相談に親切に応じてくれている。

BOOKS

貢嘎山

1997年春に札幌山岳会が中国、四川省のミニヤ・コンカに派遣した登山隊の報告書。同山は横断山脈の主峰として昔から知られた名峰である。

中国が外国人に自国の山を解放してまもなく、81年春に同山の東面、未踏のヤンズーコー氷河から北海道岳連隊が北東支稜から頂上を目指したが、8名が遭難した。翌82年春には同じく東面ではあるが、ハイローコー氷河から市川山岳会隊が頂上を目指したが、二人が遭難し、その内の一人が生還。この2隊はいずれも春のシーズンで頂上直下まで到達していた。HAJでは91年ハイローコー氷河、94年ヤンズーコー氷河いずれも秋に市川隊、北海道隊と同じルートから頂上を目指したが、94年隊では4名が遭難した。90年に北海道岳連隊がヤンズーコー氷河から北東支稜ではなく、北西稜に取りつくルートから頂上を目指したが登頂はならなかった。

今回の札幌隊は、90年の道岳連隊のルートを踏襲し、日本人としては初めてミニヤ・コンカの登頂に成功した。先ずは拍手を贈りたい。「過程がどうであれ、結果が良ければ、すべてよし」とされがちな登山の世界であるが、本報告書を読む限り、良い結果を導き出すために、努力を重ねた人々のいたことが伝わってくる。本報告書を読んで、「彼らの何が良かったのかを」推理することも、自らの高所登山を構築するための勉強となるであ

ろう。(山森)

B 5 判 100頁 本文中カラー多数。

1997年12月25日刊 価2800円

〒068-0044 岩見市北4条西10丁目1-12

芳賀 正志 ☎ 0126-23-5085

ディラン峰南面登山の記録

山梨山岳連盟が1996年夏にカラコルム、ディラン峰に送った登山隊の記録。登山は6,700mで登頂を断念した。山梨山岳界のヒマラヤ登山のシンボリックな存在であり、この登山の後、スキルブルムで遭難した中込清次郎氏が、「なぜディランか、そしてルート」の遺稿を残している。そこに込められている思いは、「未踏」への憧れであろう。頂は踏まれていても、未知のルートや静寂な中で

の登山ができる山々への思いが伝わってくる。

(山森)

B 5 判 48頁 平成9年12月25日刊

ヒマラヤのスパイ

深田久弥氏は「ヒマラヤの高峰」の「ナラカンカール」の項で、本書の著者であるシドニー・ウィグノールが書いた「Prisoner in Red Tibet赤色チベットの捕虜」のことを紹介している。彼らはイギリスのウェールズ・ヒマラヤ登山隊を組織して1955年秋に西ネパールに入ったが、結局メンバーの二人とネパールの連絡官が中国軍に捕まってしまうのである。その待遇は相当酷かったらしい。そのことを知りながら1963年には、ナラカンカールを目指した北海導大学隊のメンバーも中国軍に捕まったが、こちらの待遇は良かったらしい。

(HIMALAYA EXPEDITION OF A.A.C.H 1963 P25)

本書は、その1955年のことを1996年になって著者ウィグノールがあらためて「Spy on the Roof of the World」として出版した本の全訳である。

捕まるまでのネパール内における山の模様も書かれているが、大部分は捕まって監禁され訊問される事柄に費やされている。それは私のような素人にはあまり面白くない。解放されて真冬のヒマラヤを越えてネパールに降りてくる困難な模様は想像以上に大変ではなかったかと思う。

しかし、中国が1960年にチョモランマを、56年にムスターグ・アタ、57年にミニヤ・コンカに登ったのは、著者ウィグノールが捕まった時に「53年にエヴェレストの登頂に成功したヒラリーとテンジンが、頂上にロプノール湖の方角照準を合わせたCIAの探査装置を置いてきた」と話したことによるものだ。というくだりになると、いささか首を傾げざるを得ない。結局のところ、著者が半世紀前に捕まった中国共産党に対する、恨みがいつまでも残っていて、スパイの物真似をしたことによって、通常の人よりは、当時の国際政治の世界の情報を知り得て、中国共産党憎さが滲み出ているのだろうと感じた。そういう意味では、登山記録よりは、捕虜物語と言えるかもしれない。読後感に爽やかさはない。(山森)

シドニー・ウィグノール著 三浦彊子訳

文芸春秋社 1997年12月20日刊 2667円＋税

桃源郷 ブータン王国

札幌在住の伊藤幸男氏が、1995年、96年の2夏チョモランマの麓やラヤ、リンシ方面をトレッキングした見聞録。堅苦しい言い回しは一切なく、ブータンの素晴らしさを素直に語っている。イラストや写真もそれを助けている。但し英文の地図は国境や山の標高などかなり違うので誤解を受けやすく注釈が必要だろう。

A 5 変形判 229頁 1998年2月5日刊

北海道新聞社 2300円

30周年資金協力者ご芳名

3口(松山昭) 2口(伊丹紹泰、樋上嘉秀)

1口(久保田賢次、大蔵喜福、干場晃、木戸繁良、松田謙介) 0.5口(倉澤保男)

総計256名 5,629,000円(1998年2月22日現在)

東京集会のお知らせ

日時 3月30日(月)午後7時～

会費千円

場所 HAJルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分)
又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

9-4 クーラ・カンリ (庫拉崗日・Kula Kangri)

* 山脈：クーラ・カンリ山群の最高峰。

* 位置：ラサ (3,658m) の南南西約167.5km。

[28° 20' N, 90° 60' E]

* アプローチ：ラサまでは北京～成都が飛行機で約2時間、成都～ラサが約1時間40分の旅。ラサからはカンパ・ラ (4,756m) に登り、ヤムドク・ツォからランカーズ (4,472m) を経て、ロー・ラ (5,198m) に至り、プマヨン・ツォの東岸を行き、モンダ・ラ (5,266m) に登り、モンダに下る。モンダから右折しロザション・チュウの右岸を上流に向かいチュツォ (曲措) まで、ジープで一日行程である。ラサからチュツォまでの走行距離は約270km。尚、チュツォはナイとも呼ばれている。

* ルートの所要日数：86年神戸大学隊は、北面に3月17日BCを建設し、ABC、C1を出して西稜に取りつき、3つのキャンプを作り4月21日初登頂に成功し、翌日にも登頂した。

* 山の概念：I 峰7,538m。(以下全て中国登山指南による) I 峰の東1.1kmに7,418mのII 峰。II 峰の北東1.4kmに7,381mのIII 峰がある。III 峰の北北東2.9kmにはカルジャン (7,221m) があり、I 峰の西には氷河を挟んでジェシャン (6,676m) や三角錐のガンシャ (6,722m) がある。

* 通常の登山時期：春と秋

* 山名：クーラはチベット語で「天帝の峰」の意。カンリはチベット語で「雪山」の意。

* 小史：1958年、植物学者の中尾佐助がブータンのムナカ・チュー峠からクーラ・カンリの撮影に成功したが、その結果ブータンの最高峰と思われていたクーラ・カンリが中国領にあることが判明した。1963年ブータンからクーラ・カンリの撮影に成功したA. ガンサーの写真は、クーラ・カンリ、カルジャン、ゴウラカ・リ (6,497m) の見事な

パノラマとなっている。

* 参考文献：天帝の峰に挑む (神戸大学西藏学術登山隊)「昭和63年8月10日刊」神戸新聞総合出版センター

登山の概要

■主峰 (7,538m)

1985年

4月 偵察隊 神戸大学隊

翌年の本番のために3名で偵察に入る。4月12日北面ルウジョウの4,400m地点にBC設営。15日C1を設営して上部偵察。19日北東側の谷の源頭まで探り、23日クーラ・カンリ・ラ (5,700m) を往復。25日に西面。26日から南面スーチ (色) に移動し、スーチ川の4,400mまで。

[隊長：緒方俊治(36) 長谷川浩(26) 尾崎久純(26)]

[天帝の峰クーラ・カンリを目指して (長谷川浩) 岳人464号 1986年2月号]

1986年

3月～5月 西 稜 神戸大学隊

初登頂を目指して3月15日北面の4,450m地点にBC設営。西稜に取りつき4月2日C2を6,200m地点に設営。北稜とのジャンクション・ピーク下6,700m地点にC3を設けたのが11日。強風と天候不順に悩まされながらもルートのをばし、7,000m地点にある黒い岩は南面から廻り込み、20日に7,100m地点にACを建設。翌日居谷、坂本、尾崎と報道の大谷が頂稜のナイフ・エッジを通過して初登頂に成功した。22日にも森長、長谷川が登頂した。

[隊長：岡市敏治(45) 平井一正(54) 緒方俊治(37) 北口博教(41) 居谷千春(35) 森長敬(32) 山田健(31) 坂本淳(29) 長谷川浩(27) 尾崎久純(27) 村山誠之(27) 船原尚武(25) 門井純(22) 柴田隆宏(22)]

藤本一弘(31) 報道：大谷映芳(38) 酒井潮(40) 桜井勝之(26) 朝日教之(30)]
[天帝の峰に挑む (昭和63年8月刊)]、
[クーラ・カンリ初登頂(平井一正)「山岳第82年」日本山岳会 1987年12月刊]

1993年

4月～5月 北面 フランス隊

北面4,450m地点にBC建設。5,400m付近にABCを出して西氷河を調査。5月21日ベシエとジェシエ、セヴニエが6,000m峰に初登頂した。

[隊長：アルノー・ベシエ、リシャール・ジェシエ、ギー・セヴニエ他7人]

1994年

4月～5月 西稜 オーストリア隊

4月14日カトマンズを出発し、北面5,200m地点にBCを建設。標高差2000mの北壁をねらったが、あきらめて西稜に転進。5,400m地点にC1、6,400m地点にC2を建設。5月1日クルトが神戸大に次ぐ登頂に成功。3日にもヘルムート、オットー、アントンの3名が登頂した。

[隊長：ペーター・ヴァインガルトナー(25)、クルト・エプナー、ヘルムート・オルトナー、オットー・プラッテナー、アントン・ドルフス]

9-5 カルジャン (卡熱彊・Karangjiang)

*山脈：クーラ・カンリ山群。

*位置：ラサ(3,658m)の南南西約165km。

*アプローチ：ラサまでは北京～成都が飛行機で約2時間、成都～ラサが約1時間40分の旅。

ラサからはカンパ・ラ(4,756m)に登り、ヤムドク・ツォからランカーズ(4,472m)を経て、ロー・ラ(5,198m)に至り、プマヨン・ツォの東岸を行き、モンダ・ラ(5,266m)に登り、モンダに下りる。モンダから左折しロザション・チュウの右岸を下流に向かいザーリ(扎日)まで、ジープで一日行程である。ラサからザーリまでの走行距離は約260kmである。カルジャン主峰、中央峰、北峰のいずれを攻める場合もBCはザーリに設けるのが便利である。

*ルートの所要日数：86年HAJ隊は、北面のモンダの4,200m地点にBCを9月11日建設し、西稜に取りつき、10月14日に新郷ら3名が主峰の初登頂に成功し、16日にも登頂した。

*山の概念：クーラ・カンリの北北東2.9kmにあり三つの峰がある。主峰は二つのピークに分かれており、両ピークの距離は350m。その間は深いキレットになっている。北が7,216m、南に7,221mの標高値が与えられている。(以下全て中国登山指南による)

主峰の北1.7kmに7,418mの中央峰、中央峰の北西1.7kmに6,824mの北峰がある。またカルジャンの東9kmにはゴウラカ・リ6,497mがある。

*通常の登山時期：春と秋

*山名：チベット語で「神嶺」の意。上流のチュツォの住民からはチュービエソン(Cyubeson)と呼ばれている。

*小史：1963年、オーストリアのA. ガンサーがブータンのムナカ・チュー峠からクーラ・カンリの撮影に成功したが、そこには、カルジャン、ゴウラカ・リを含めた大パノラマが写し出されており、カルジャンの存在が明らかになった。

*参考文献：ヒマラヤ名峰事典 [ブータン・ヒマラヤ 平凡社・1996年11月刊]

登山の概要

■主峰 (7,216m)

1986年

9月～11月 西稜 HAJ隊

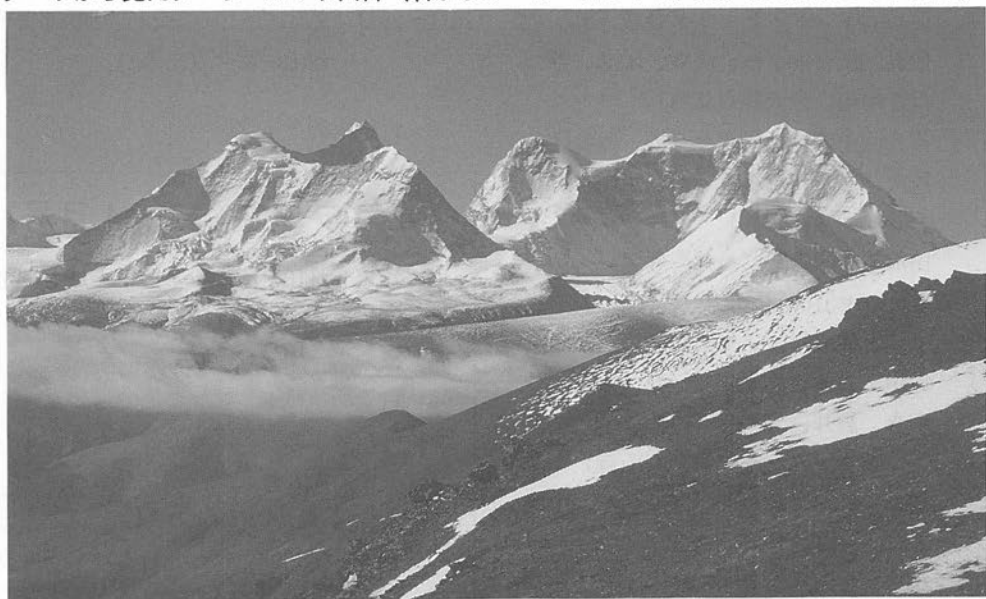
9月8日初登頂を目指して6人で入山。北面モンダ村の4,200m地点にBC設営。14日ABCを5,300m地点に設営。氷河上の5,730m地点にC1を出して西稜に入り、6,150m地点にC2、10月11日6,580m地点に仮C3

を設営。13日に7,000m地点にC3を設営して翌14日に岩崎、友田、新郷の3名が北のピークに初登頂した。南のピークへは深いキレットとなっており断念した。16日には宮崎、保坂も登頂した。

[隊長：新郷信廣(43) 友田健治(37) 宮崎勉(38) 保坂昭憲(38) 岩崎洋(26) 綾戸新二(21)]

[烈風の頂へーカ熱彊峰初登頂の記録(ヒマラヤ182号 1987年1月号)]

▼モンダ・ラから見たクーラ・カンリ山群(右からクーラ・カンリⅠ、Ⅱ、Ⅲとカルジャン主峰)



別冊山と溪谷

Rock & Snow

ロックアンドスノー

ヤマケイから新しい山の雑誌

日本で初めての「岩と雪の世界で遊ぶ」
スペシャルマガジン



'98年4月上旬発売予定!

'98 Spring & Summer Issue ●予価980円(税込)

写真集

FREEDOM 平山ユージの世界

ケンちゃんが撮ったユージのクライミング写真集
写真/飯山健治
発売中! ●定価:本体3800円+税

■山と溪谷社 ■〒105 東京都港区芝大門1-1-33/TEL 03(3436)4055・FAX 03(3433)4057<営業部>

■ 寸 感 ■

アルパイン・クライミングの世界に「地方の時代」を築いた高見和成氏の訃報に合掌。(山森)

事務局日誌(2月)

- 1日(日) 第19回インド・ヒマラヤ会議(於、豊島区民センター、山森、尾形、寺沢、中川、野沢井ら48名)
- 8日(日) 第6回中国登山研究会(於、豊島区民センター、山森、寺沢、中川、野沢井、酒井ら12名)
田海子山隊合宿(酒井ら8名)
- 9日(月) ヒマラヤ316号発送
- 10日(火) 事故と環境対策研修会講師依頼
- 14日(土) 労山チョモランマ隊壮行会(遠藤、山森、酒井、寺沢)
- 16日(月) ニンチン・カンサ隊集会(山森)
- 18日(水) フカム・シン氏の件協議(稲田、山森)
- 20日(金) CMA曾曙生主席、趙建軍副部長と

協議(於、東京、山森)

日山協国際交流歓迎会(於、岸体育館、山森)

21日~22日 第36回日山協海外登山研究会(於、大学セミナーハウス、山森、寺沢)

23日(月) 東京集会(12名)

25日~26日 文部省登山研修所大学山岳部リーダー冬山研修会(山森)

ヒマラヤ No.317 (4月号)

平成10年3月10日印刷 10年4月1日発行

発行人 稲田 定重

編集人 山森 欣一

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒170 東京都豊島区東池袋4-2-7

萬栄ビル501号

電話 03-3988-8474

郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

●ガモフバッグ(携帯用高压バッグ/総重量6.7kg)

●パルスオキシメーター

(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店：日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先：株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階

TEL: 03-5245-0511 FAX: 03-5245-0510

(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがご答えします。



マウンテントラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号

遙かなる高みへ



個人・グループの手配旅行、航空券の取り扱い専門デスク



キャラバンデスク TEL03-3237-8384

～地球の果てまであなたのキャラバンのお手伝い～

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のパイオニア



株式
会社

西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)1391(代表)

キャラバンデスク 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)8384(代表)

大阪営業所 〒530 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F ☎06(367)1391(代表)

カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING(P) Ltd. P.O. BOX3017 KATHMANDU. NEPAL ☎221707

運輸大臣登録一般旅行業607号

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店/〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店/〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店/〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェア館/〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店/〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店/〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(641)5707
- 高崎店/〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店/〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店/〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟プラカ店/〒950 新潟県新潟市天神1-1 プラカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店/〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店/〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店/〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店/〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店/〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店/〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店/〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メールオーダー)/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所/〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004